

おふでさきの 世界を歩く

第

13

回

山澤昭造

【やまざわ しょうぞう】

本部准員

天理教校本科研究課程主任

三号1—27 (その2)

三号15—18
いままでにないこと始めかけるのは

このよふのにんけんはじめもとの神

たれもしりたるものハあるまい

どろうみのなかよりしゅごふをしへかけ

それがたん／＼さかんなるぞや

このたびハたすけ一ぢよをしゑるも

これもない事はしめかけるぞ

(三 15)

(三 16)

(三 17)

いま、でにない事はじめかけるのわ
もとこしらゑた神であるから

(三 18)

外冊^{げさつ}中山本では、15の右肩に「十二日」とありま

す。明治六年陰暦十月十二日を指すと思案します(連

載第11回「三号を読むにあたって」、本誌立教189年4月号参照)。

これまで、「おやしき」周辺の人々の心を澄まし
て、「はしら」「かんろだい」および「真柱」を入
れるということが話題とされてきました。



ところが、「かんろだい」や「真柱」といった事柄は、人間の頭で考えて、そのまますぐに分かるものではありません。人間の常識を超えた話になります。

そこで、この段落では、いま教祖が付けようとしておられるこの道は、人間世界をこしらえた親神様が、じきじき表に現れて、はじめかけられたものなのだという事をあらためて断っておられるのではないのでしょうか。

すなわち、15で「この世の人間をはじめた元の神について、本当に知っている者は誰もいないだろう」と言われたうえで、16では「その月日親神が、どろ海の中から、ッウを」とッミを引き寄せ、これらに、そのほかさまざまな道具を寄せたうえで、人間創造の守護を教え、はじめかけた結果、人間は誕生したのである。そして、その人間が、親神の守護のもと、だんだんと長い時間をかけて、今日のようになり、栄えてきたのであるぞ」と言われています。

言葉を補って解釈しましたが、16は、元初^{もじはじま}りから

今日に至る人間の成人の歴史、元初り以来の親神様のご苦心を、たったの一首で教えてくださっているのです(※1)。このお歌が、「おふでさき」の中で、「元初りの話」についてふれられた最初のものになります。

どろ海の中からの守護を述べられたうえで、「このたび、たすけ一条を教えようとしているのも、これもいままでに教えていないことを、親神が教え、はじめかけるのである」(17)「いままでにないことをはじめかけるといふのも、もともと何もないところから人間世界を創造した神だからこそできることなのだ」(18)とされています。

「たすけ一条」とは、親神様、教祖の子供かわいいいっぱいの親心を指すとともに、教祖によって付けかけられている「たすけ」の道のことです。ここでは具体的に「かぐらづとめ」を指すと思案します。

もともと何もないところから人間世界をはじめたのと同じようにして、このたび、この「おやしき」から「たすけ一条の道」である「かぐらづとめ」を教え、人間世界をたすけようとしているのだと言わ



れているのです。教祖にとって、「たすけ一条の道」である「かぐらづとめ」を教えるということは、人間世界をはじめ出したのと同じくらい、深い思いの込められた出来事なのではないでしょうか。

教祖が、おそばの人に、「この度は最初人間を創くりかえった時の道筋を繰返して道をつける」とおっしゃったという話も伝わっています（※2）。

18では、「いましようとしていることは、人間がしていることではない。人間世界をこしらえた元の神がしていることなのだ。〴〵はしら〴〵（〴〵かんろだい〴〵 および 〴〵真柱〴〵）を入れるということも、たすけ一条の一つの段取りとしてのことであって、たとえその意図がよく分からなくても、その通りにしてくれ。これから、人間世界をたすけ上げていくのだ」と、このようなことを述べようとされているのではないだろうか。

三号19—27 すみやかに心を澄まして聞くならば

——にち／＼に神のはなしがやま／＼と

つかえてあれどとくにとかれん (三 19)

なに、てもとかれん事ハないけれど

心すましてきくものハない (三 20)

すみやかに心すましてきくならば

よろづのはなしみなとき、かす (三 21)

このよふのたしかためしかかけてある

これにまちがいないとをもゑよ (三 22)

このためしすみやかみゑた事ならば

いかなはなしもみなまことやで (三 23)

なにもかもいかなはなしもとくほどに

なにをゆうてもうそとをもうな (三 24)

めへにめん神のゆう事なす事わ

なにをするとも一寸にしれまい (三 25)

はや／＼とみへるはなしであるほどに

これがたしかなしよこなるぞや (三 26)

これをみてなにをきいてもたのしめよ

いかなはなしもみなこのどふり (三 27)

〈心を澄まして聞くならば、よろづの話みな説き聞かす〉
外冊中山本では、19の右肩に「十五日」と日付が
あります。



19で「日々に、親神としては、おまえたちに伝えたい話が山のように聞えてあるのだけれども、説くうと思っても説くことができないのだ」と言われています。

それでは、なぜ説いて聞かせてやりたいけれども、説くことができないのか。その理由が、次のお歌に述べられています。

すなわち、「何でも説けないことはないけれど、心を澄まして聞く者がいないから、説くことができない」(20)「すみやかに心を澄まして聞くなら、よろづの話をみな説き聞かすようにするの」(21)と言われています。

みな的心が澄んでないから説くことができない。心が澄んでいないと分からないのが、親神様のお話です。

「心を澄ます」ことについては、三号7—14で、心が澄んだら「はしら」を入れると言われていましたが、ここでは、さらに心が澄んだら「よろづの話」をみな説き聞かすとも言われています。教祖のお話を、心を澄まして聞くようにと諭されたのです。

「心が澄むとは」

それでは、ここで言われる「心が澄む」とは、どのような心を指すのでしょうか。

芹澤茂氏によると、「心が澄む」とは、「親神様とおやさまと、おやさまより知らされた親神様のお話とお道(天理教)が信じられるということ」(傍点 は山澤、以下同)で、言葉を換えると、「親神様の世界、陽気ぐらしの世界にめざめている」状態であるといえます(※3)。

まず「信じられる」心になり、次にその教理を心から「信じ」、身に行っていくことによって、その教理によって教えられるところが真理として実感されるようになる。これが、教理が本心に「分かった」という状態です。①「心が澄む」(信じられる心になる) ↓ ②「信じる」 ↓ ③「分かる」、信仰にはこのようなプロセスがあると言われているのです。

その意味で、「心が澄む」「心を澄ます」ことは、この道の信心を進めていくうえで、とても大切です。信仰の第一歩ともいえるでしょう。親神様のお話は、どろ海中のお話を含め、人間がこれまでに聞いたこ

とがない、常識を超えた世界のお話です。心を澄まして聞かないと、何を言おうとされているのか分からないお話で、親神様は、心が澄んだら、どんな話もみな説き聞かすと言われています。

へ「ためし」について

三号14で、おそばの人々の心が澄んだら「はしら」「かんろだい」および「真柱」を入れ、そうした「証拠試し」にかかると言われていました。

22と23では、心が澄んだら、説き聞かせてやりたい「よろづの話」の一例として、「証拠試し」が話題とされているのではないかと思案します。

すなわち、「この世の確かなためしがかけてある。これに間違いがないと思え」(22)、「このためしがすみやかに実現してきたことなら、(親神の話は)どんな話もみな真実である(ということが分かるだろう)」(23)と述べられています。

ところが、これらのお歌を読んでも、何に「ためし」がかけられてあるのか。その肝心の中身について、直接文字で記されてはいません。

結論から言いますと、このお歌は、「かんろだい」

という言葉こそ見えませんが、「かんろだい」には「ためし」がかけられているのではないかと思案します。「かんろだい」に「ためし」がかけられるとは、どういうことかというところ、「かんろだいづとめ」を勤めることによって、親神様の不思議なお働きが確かに現れてくるか、「ためし」でみるようにということです(これを「かんろだいづとめ」による「ためし」と呼びたいと思います)。そして、これは三号14で、「証拠試し」と言われていた事柄でもあります。

「ためし」とは、「試し」です。親神様のご存在や、教祖のおっしゃることが、真実であるかどうか、人間が実際に「試してみる」ということ、「試してみよ」と言われているのです。試した結果、教祖のおっしゃる通りの事実が現れてきたら、それは親神様のお話が真実であることの「証拠」になります。三号14の「証拠試し」とは、「証拠となる試し」のことで、親神様のお話が真実であるということが心に治まるよう、これから「証拠」を見せるから「ためし」てみるようにと言われているのです。



そもそも、元の神様であるなら、「ためし」必要や「証拠」を出す必要などないわけです。しかし、子供である人間のことをおもんばかった親心から、このように言われているのです。中山正善・二代真柱様は次のようにお話しになったことがあります。

……親神様の思召^{おぼしめし}だから云^いうならば、私は証拠というものは不必要だと思^{おも}うんです。我々全部信賴^{われわれ}しているものに対して、疑いを持たないものに対して証拠というものは要らないんです。

(略) 証拠というものに重きを置いておられるのは、人間の成人ということを反面に於^{おい}てお考え頂^{いただ}いている。(略) 子供の成人し易^{やす}いように、分^{わか}り易いように、という親心からい、証拠をお見せ頂^{いただ}いているのだと考えられる。

(中山正善『おふでさきに現れた親心』道友社、昭和30年、102—103ページ)

「証拠」は、子供が成人しやすいように、分かりやすいようにとの親心の現れであると言われています。

〈この世の確か「ためし」がかけてある〉

先ほど「この世の確かなためし」(22)とは、「か

んろだいづとめ」による「ためし」であると述べましたが、それでは「かんろだいづとめ」による「ためし」とは、どのようなことを指すのでしょうか。

これは、「ぢば」に「かんろだい」を据え、「つとめ人衆」が鳴物を入れて、「かぐらづとめ」を勤めるとき、親神様の不思議珍しいお働きが「たすけ」として現れる。それが親神様のお話が真実である証拠となるということです。

この「かんろだいづとめ」による「ためし」は、このあと三号108—112(※4)、133—134にも出てきますし、第十二号および第十五号(特に第十五号)において詳しく述べられることになります。

特に、第十五号では、「かんろだいのつとめ」(ちんばのつとめ)を勤めることによって、医者でも治すことのできな^{しゅうじ}秀司様の足の身上を、元の通りにして返すこと、これが「かんろだいづとめ」による「ためし」の具体的内容として記されています。

すでに述べたように(連載第5回、本誌立教188年10月号参照)、秀司様の左足の病は、立教の機縁となったのですが、その後も癒えることなく、親神様が何か特

別な思召を伝えようとされる際には、時折、激しく痛むことがあったそうです。

この足の悩みを「かんろだいのつとめ」を勤め、治すことで、まず「おやしき」において「おつとめ」による守護の偉大さを示し、「うち」の者の心を澄まそうとされたのです(※5)。「うち」から「ためし」をしようとされているのです。

その意味で、「かんろだいづとめ」による「ためし」は、

このためしなにの事やとをもうかな

つとめ一ぢよせくもよふやで (十五 41)

と言われるように、「つとめ」による「よろづたすけ」を急ぐための段取りの一つであり、

せかいちうをみな一れつをたすけたさ

そこでためしがゑらい事やで (十五 43)

と言われるように、ひいては世界中一れつを皆たすけるための大事な段取りでもあるのです。

なお、このほかに、「おふでさき」においては、「つとめ」による「証拠」が、「せかい」への布教伝道において重要な意義を持つということが話題にされます(次ページにコラム)。

ちなみに、「おふでさき」に出てくる「ためし」には、これまで述べてきた「つとめによるためし」のほかに、「わがみのためし」と呼ばれるものがあります(※6)。これについては、三号44で解説したいと思います。

〈はやばやと見える話であるほどに〉

24から27は、次のような意味になります。

「このようにして、これから親神は、何もかもどんな話も説くので、何を言ったとしても嘘と思わないようにしてくれ」(24)、「人間の目には見えない神の言うこと、なすことというのは、何をしているのか簡単には分からないだろう」(25)、「しかし、親神が説いているこの話は、はやばやとその通り実現してくる話であつて、これが、親神の話が真実であるということの確かな証拠となるのだ」(26)、「この親神の話が実現してくる様を見て、何を聞いても楽しんで(信仰の道についてきて)くれ。親神の説く話はみなこれと同じ道理である。(見えん先から説いておくが、あとから必ず現れてくるのである)」(27)。

「つとめ」による「ためし」

「つとめ」による「ためし」を「うち」から
行うことについては、「おふでさき」のほか
に、山田伊八郎氏が教祖のお言葉を記した
「教祖様御言葉」〔明治十八年四月十九日 神
様御話〕の中にも、次のように記されている。
（明治十八年七月四日の「神様御話」にも同
様の記述がある）

早々と、なにのたすけも皆つとめ。

一番さいしよふに、こいのさづけ。此
こいハ、はい三合に土三合にぬか三合。此
三、三、九合一駄トシテ、是に本づとめを
かけて 此こへに水お入て、ハらのすべ
にて田地へうち、夫レヨリ はいでのつと
め。虫払のつとめ、雨がふらねバ雨こひつ
とめ。雨がふりすげバ、雨あづけのつとめ。
又夫レヨリみのりのつとめ。

此つとめにかけてつくりたら、一反二付、
米六石迄つくりとらせ被下。是を内からた
めしにかかりたら、六石迄の豊作ヲとらせ
くださる。

そふしたならバ村方ハ、さいしよふに、
でてる。再度くる者ハ申ス二あらず。此
たすけにかかりたら、世界中、程なくひろ
まるで。

又、世界中の百姓をさいしよふにたすけ
たら、世界ゆたかになる。人間も皆一れつ、
よふきになる程に。

（道友社編『先人の遺した教話（三）根のある
花・山田伊八郎』昭和57年、48―49ページ）
「うち」からの「ためし」が「証拠」となり、
それが「せかい」へ道を伝えることにつなが
ると、ここでも述べられている。

なお、26の「これ」については、「親神様が説か
れるお話が、そのまますぐに実現してくること」と
取ることもできますし、「かんろだい」と限定して

解釈することもできます。後者の場合は、「かんろ
だい」が、親神様のお話が真実であるということの確
かな証拠となる」という意味で、第九号53―56に対

※ハらのすべ＝藁（わら）の穂先だけを抜き取ったもの

応したお歌になります。

いずれにしましても、心を澄まし、先を楽しんで、この道についてきてもらいたいと望まれているお歌が、これらのお歌ではないでしょうか。

よび「真柱」を入れ、「かんろだいつとめ」による「証拠試し」に取り掛かろうと思う。だから、しっかりと心を澄ますよう努めてくれと諭されているお歌が、これらのお歌ではないでしょうか。

三号1―27では、「うち」に関する事柄が話題とされました。「おやしき」で「かぐらづとめ」が勤められるようにするにあたって、まずはそばの者が心を澄ましてもらいたいと望まれたのです。

心が澄んだら「しんのはしら」「かんろだい」お

※1 上田嘉成「元の理」
『昭和五十一年 教会長
講習会講義録』河原町大

教会、昭和52年、58―59
ページ参照。
※2 山澤為造「道の旬

と非常時日本」『第四回
教義講習会講義録』道友
社、昭和8年、21ページ。

おふでさき
の世界
を歩く



※3 芹澤茂「みんなの
教理入門 連載5 信じ

る『すむ・わかる』『天
理時報』昭和59年2月5
日号参照。

※4 三号108—112に、次
のように述べられている。

「いま、でハしよこため
しとゆへあれど かんろ
ふだいもなんの事やら」

(三 108)

「このものを四ねんいせ
んにむかいとり 神がだ
さしめこれがしよこや」

(三 109)

「しんぢつにはやくかや
するもよふたて 神のせ
きこみこれがたい」

(三 110)

「これまでハぢうよじざ
いとまゝとけど なにも

みへたる事わなけれど」

(三 111)

「これからハいかなはな
しもときをいて それみ
ゑたならじうよぢざい
や」

(三 112)

※5 「かんろだいつと
め」による「ためし」に
ついては、中山正善『続
ひとことはなし』(道友社、
昭和26年)においても、

第十二号の解説の中で次
のように言及されている。

「早く陽氣づとめによつ
て足のちんばを直して、
よろづたすけの証拠を出
して見せたく考へてゐる

(二二四)。この証拠を見
たならば、どんな疑ひ深
い者も得心がゆくだらう。

教祖の話は、何につけて

もこの道理である事に得
心がゆくだらう(一二
五)(175ページ)

そして、第十五号の解
説では「四十三年以前か
らのためしとして、秀司
祖父の足を例に、ざんね
んはらしを説き、ちんば
のつとめを急ぎ込まる。
即ち、よろづたすけのつ
とめを、ためしを以て急
ぎ込まれてゐる点、切実
に感ぜられる号である」
(203ページ)と述べられて
いる。

※6 芹澤茂「おふでさ
きに学ぶ」『みちのとも』
昭和46年11月号、34—35
ページ参照。

昭和46年11月号、34—35
ページ参照。